

# 可児町神崎山古墳発掘調査報告書

岐阜県可児町教育委員会

## ごあいさつ

木曾川と飛驒川とが合流している本町は、県内でも有数の埋蔵文化財の宝庫であります。木曾川左岸に発達した河岸段丘上には、縄文・弥生・古墳時代の住居跡や古墳が数多く存在しているのは、著名な事実であり、そのなかには、県下最大の規模をもつという国指定の史跡「長塚」があり、町周囲の丘陵には、平安・鎌倉時代ごろからの陶器の古窯跡が、また、桃山時代の茶陶の第一にあげられる志野・織部が焼成された古窯跡があり、それらの埋蔵文化財の数は三百余所にあがっています。

昭和49年5月、土採取によって発見された神崎山古墳は、丘陵上に位置していますが、中途半ばな、土採取のため、地元民は災害予防のための防災工事を強く要望しましたので、今回の発掘調査を行うことになりました。幸いにも、別記のような数多くの埋蔵文化財が発掘され、本町の歴史を探る上にも貴重な資料を得ることができましたことは、まことに意義深いものがあります。ここに、関係各位の御協力に対し、深く感謝の意を表します。

昭和51年11月

可児町長 林 桂

## 序

神崎山古墳の調査が完了した。調査に当たった中島勝国主任調査員を中心として、後藤啓次・可児鋼平両調査員、または、発掘作業に協力された地元の方々に深謝する次第である。

広見瀬田地区の背後に続いている丘陵の一支脈の西端頂上に位置している神崎山古墳が土採取工事に伴って見出されたもので、今回、防災工事を施すことに先立って発掘調査をし記録保存をすることとなった。発掘調査の結果、過去の盗掘を受けていたにも拘らず床面は、余り荒されていなかったことは幸であって、直刀一振、須恵器数点・ガラス小玉類が出土した。

また、当古墳発掘に伴ない、それ以前の埋葬施設の存在が知られ、それをも調査したが、当古墳造営と今回の土採取工事によって完全なる姿で遺存していなかったのが残念である。十分なる資料とはいえないが、今後の研究の参考になれば、幸甚だと思う。

昭和51年11月

可児町教育委員会

教育長 金子 栄五郎

## 神崎山古墳発掘調査調査員構成

可 児 町 長		林		桂
可児町教育委員会・教育長		金 子	栄 五	郎
可児町教育委員会・社会教育課長		鈴 木	利 一	
調 査 主 任	岐阜県考古学会員	中 島	勝 国	
調 査 員	〃	後 藤	啓 次	
〃	〃	可 児	鋼 平	
県 文 化 課		波 多 野	寿 勝	
可児町文化財審議委員		金 子	数 雄	
〃		森 川	益 三	
〃		金 子	一 郎	
〃		続 木		正
〃		安 藤	寿 作	
〃		佐 藤	鎬 平	
〃		奥 谷	一 勝	
〃		稻 垣	雄 之 助	
〃		平 田	録 郎	
現場主任・可児町教育委員会・文化係		田 口		茂
調 査 補 助 員		可 児	貞 子	
〃		渡 辺	三 千 子	
〃		飯 田	真 理 子	

# 目 次

ご あ い さ つ

序

1. 神崎山古墳の位置	1
2. 調査の契機と経過	3
3. 墳丘と内部構造	5
4. 遺物の出土状況	9
5. 出土遺物	11
6. ガラス小玉の科学分析	21
7. 土  拡      墓	24
8. 結      語	25

## 挿 図 目 次

付近航空写真	
挿図1 神崎山古墳付近地形図	1
挿図2 神崎山古墳地形実測図	3
挿図3 墳丘断面図	5
挿図4 石室実測図	7
挿図5 墳丘側面図（根巻石）	8
挿図6 排水溝実測図	8
挿図7 遺物の出土状況	9
挿図8 土玉の出土実測図	11
挿図9 装身具・直刀・鉄鏃など実測図	12
挿図10 須恵器実測図（その1）	16
挿図11 須恵器実測図（その2）	18
挿図12 土拡墓実測図	24

## 図 版 目 次

図版1 神崎山古墳の遠・近景
図版2 石室・閉塞状況
図版3 排水溝・根巻石
図版4 遺物出土状況
図版5 遺物出土状況
図版6 土拡墓・同出土遺物
図版7 装身具
図版8 直刀・鉄鏃類
図版9 須恵器（脚付壺・広口壺 ・短頸壺等）
図版10 須恵器（坏）

## 例 言

1. 本報告書は、岐阜県可児郡可児町広見瀬田字綾ヶ根1,064及び1,066番地に所在する神崎山古墳についてのものである。
2. 本古墳の発掘調査は、昭和51年4月24日より同年10月30日にわたって行なわれた。
3. 発掘調査の主体は、可児町教育委員会であり、本調査の担当は、中島勝国・後藤啓次・可児鋼平であった。
4. 出土品は、可児町教育委員会で保存する。
5. ガラス小玉の科学的分析は、郷土と縁のある、石塚硝子株式会社研究所へ依頼した。
6. 須恵器などの時期設定などには、名古屋大学文学部考古学教室、檜崎彰一助教授に御教示賜った。
7. 何かと発掘方法などについて、日本考古学協会員の吉田英敏氏に助言を賜った。

神崎山古墳周辺航空写真



# 1. 神崎山古墳の位置

神崎山古墳は、岐阜県可児郡可児町広見瀬田字綾ヶ根1,064及び1,066番地に所在する。可児町は、岐阜の東方約30kmのところの位置し、東は、御嵩町、南は、多治見市・土岐市の両市、北は、美濃加茂市、西は、愛知県犬山市と接している。

広見瀬田地区は、木曾川の一支流である可児川が開折した、御嵩町から続いている平坦地とその南側に沿った丘陵性の山地の北側からなっている。

神崎山古墳は、可児丘陵の支脈である、久々利・御嵩境の丘陵性の山峰が、西方へと延びている支脈のまた一支脈の西端の山頂に築成されている。なお本支脈とその一小支脈の間は、細長い洞となっていて、当古墳は、その洞の入口にあって、眼下に洞が一望され、且つ、可児川の開折した平坦地をも一望できる位置にある。

広見瀬田地区には、以前はかなりの数の古墳があったようであるが、現在、確認できている

挿図1 神崎山古墳付近の地形図





のは、当古墳も含めて5基のみである<sup>(1)</sup>。東続きの広見柿田地区には5基確認され<sup>(2)</sup>、本支脈の西端には、石製腕飾の鋏形石・車輪石や内行花文鏡・巴形銅器などが出土して有名な身隠山古墳<sup>(3)</sup>群がある。

同地区の山地の頂を越えた南側には、久々利川流域で、不孝寺塚や羽崎中洞横穴古墳をはじめとする数多くの円墳や横穴古墳群が山腹に点在している。また、神崎山古墳から北西へ2kmほどへだてた、国指定の長塚古墳や、北には、約1kmへだてた丘陵に前方後方墳の御嵩町伏見の東寺山古墳も眺望できる。

注(1) 昭和51年3月末現在、可児町教育委員会確認数

(2) 岐阜県遺跡地図

(3) 岐阜県指定文化財調査報告書(7)

参考文献……岐阜県史「原始編」……1972

広見町教育委員会「広見町郷土誌・身隠」……1953

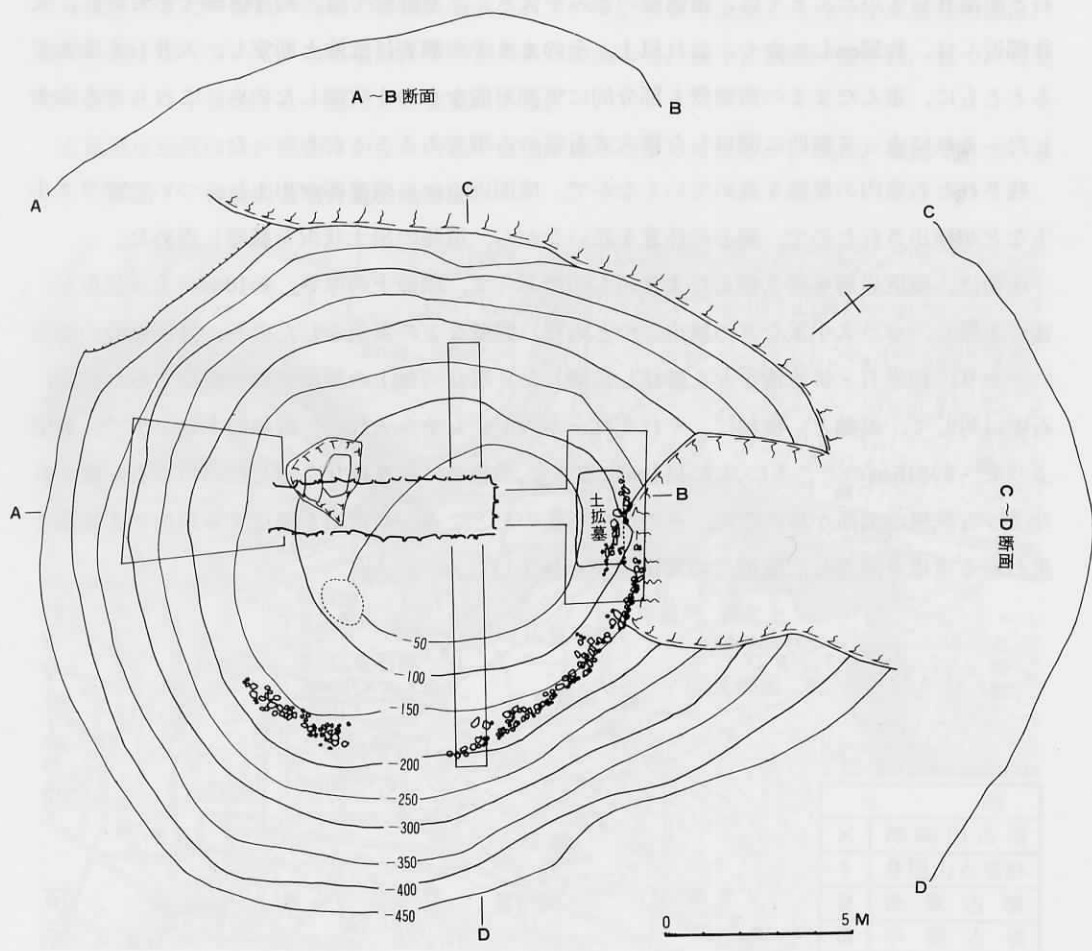


神崎山古墳	×
長塚古墳	○
東寺山古墳	△
御嵩町伏見	□

## 2. 調査の契機と経過

昭和49年5月、地主の浅野嘉文氏が「岐阜県土採取規制条例」を知らずに無許可のまま土採取をした際に、石積様な個所が露出したのを不審に思われた住民より、町教委へ連絡があり、町教委は、当時、川合宮之脇遺跡の発掘調査のために来町して居られた、日本考古学協会員の大江命氏などが観察され、古墳と確認されたので、町教委は、遺跡発見届を県教委文化課へ提出した。

挿図2 神崎山古墳地形実測図



一方、土採取に対して、岐阜県可児県事務所から、土採取行為の停止と林地崩壊防止施設の実施を提示され、その防災工事の為に、神崎山古墳を事前に発掘調査をすることとなった。

現地での調査は、昭和51年4月24日から6月1日までの間に実施した。

調査は、まず墳丘最上部に、レベルの基準点を置いて地形測量をした後、過去の盗掘のための痕跡か、二つの露出している石を除去し、そこから掘り広めていった。その結果、両側壁の一部と思われる石積と閉塞設備の一部が確認された。レベル-219.8 cmから脚付壺を始め、坏などの須恵器・直刀などが検出された。それまでの部分は、過去の盗掘のために、天井石・側壁の一部も崩されていたが、床面は、凝灰岩層を掘り整えたままのものであることも確認された。ついで、天井石のまだ遺存している部分を掘り進めることとした。石室内は、流入した赤色土が詰り、基底部近くには、天井石の破片・南側壁の崩壊した石・北側壁の一部の崩壊した石とが混在していた。とくに、南側壁の歪みが大きく、基底部では、約148cmであるのに、天井部近くは、約53cmしかなく、これ以上、そのままの調査は危険と断定し、天井石を除去するとともに、歪んだままの南側壁も部分的に実測可能なものを実測したのち、これらをも除去した。それによって南西に開口した横穴式石室の古墳であることがわかった。

残された石室内の発掘を進めていくなかで、床面近くから須恵器が出土し、ついでガラス小玉などが検出されたので、細心の注意を払いながら、遺物の出土状況を観察し進めた。

床面は、凝灰岩層を掘り整えたままのものであって、床面上の厚さ、約10cmの土は採取し、後に水簸し、ガラス小玉などの検出につとめた。側壁などの実測をしたのち、外部施設の検出にかかり、根巻石・排水溝などを確認し実測した。墳丘の封上の築成状態を観察するために、石室に対して、縦軸と、横軸に、それぞれ一本のトレンチを入れた。縦軸のトレンチで、奥壁より東へ約246cmのところ、巾約114cmに渡って、黒色土に混り握りこぶし程の川原石が敷かれたような状態の箇所が検出され、その部分を広めたところ、当古墳を築造する以前の土拵墓と思われる遺構を調査し、現地での発掘調査を終了した。

### 3. 墳丘と内部構造

#### (1) 墳丘

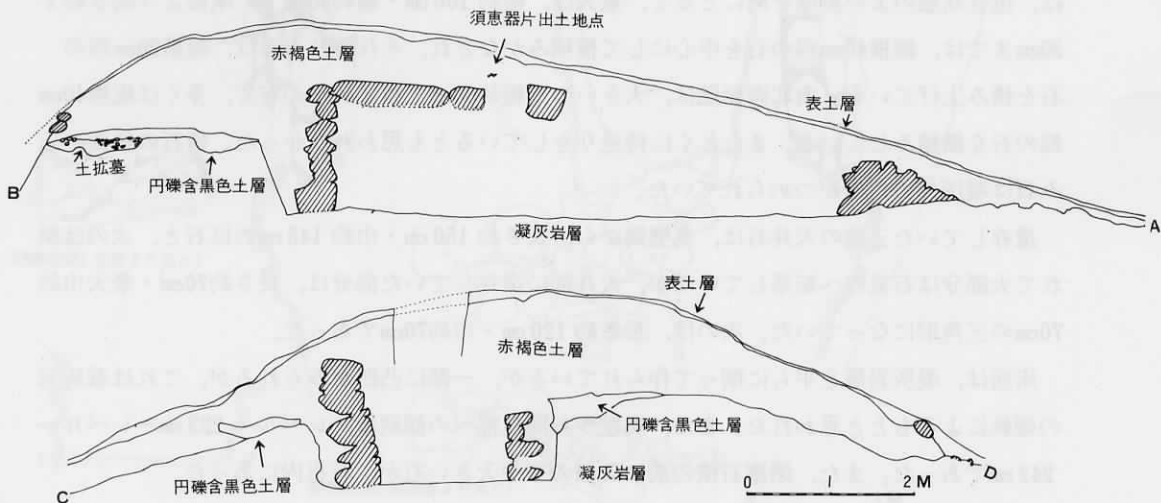
可児丘陵の支脈のまた一支脈の西端、頂上に築成されていて、標高は、138.8mで下の平坦地との比高差は、約32mである。古墳は、前述のように、南に巾約100m・長さ約1,100mの二又に分かれた洞の入口にあたる丘陵の頂上に築成され、古墳の北は、可児川の開析した平坦地であって、眺望はよい。

調査前の墳丘のようすは、丘陵のほぼ真中に一本の杉の木が高くそびえ、周辺の人々の話しでは、その近くに、かつて五輪石があったが、下へ転落したという。墳頂より約460cm隔った所に、過去の盗掘のためか一部が陥没し、そこに天井石の一部と思われる、長さ約120cm・巾約70cmの石・長さ約100cm・巾約50cmの石の二つの石が露出していた。また、墳丘の東側に根巻石と思われるものも一部露出していた。北側は、乱土採取のために断崖状となっていた。

墳丘は、前述のような盗掘と乱土採取と、自然崩壊も手伝って、外形を明確にすることは、不可能だが、現在の規模を示すと、南北長約11m・東西長約13m・高さ約2.5mであり、それ以上の円墳であったと思われ、復原数値を示すと、径13m前後・高さ2.5m程であったろう。

墳丘の構造は、表土層の下には、赤褐色土層で、凝灰岩の角礫を含んでいた。奥壁付近には、

挿図3 墳丘断面図



川原石の円礫まじりの黒色土層が一部見られたが、これは、後述するが、当古墳を築成する以前の土拵墓の盛土の一部であったと思われる。石室は、凝灰岩層を約75cm程掘り込んで築成されていて、この凝灰岩層は、南と北とでは、ややその高さが異なり、(南側壁側—136cm・北側壁側—151cm)南の方がやや高い。従って、凝灰岩層は、北に傾斜していたものと思われる。それが石室を歪ませ、南側壁を崩れさせた原因の一つとも考えられる。また奥壁直前の凝灰岩層の床面より表土迄の高さは、約225cmであった。

なお、外部施設として根巻石の遺存していた箇所が二カ所あった。一つは、東から南の側面の墳頂よりレベル—約83cmよりレベル—約200cmに、延約10mにわたって径20cm程の石を一・二段の石を並べ石垣状にしていた。他のは、その石並より、約260cm隔ったところから西へ墳頂よりレベル—約170cmのところ延約326cmにわたって同様な大きさの石が並べられていた。

## (2) 石 室

古墳の主体部は、ほぼ中心部に奥壁をもち、南西に開口した長方形の横穴式石室で、石室の中軸線の方向は、北39度を向き、玄室と羨道との区別をする施設はとくになかった。

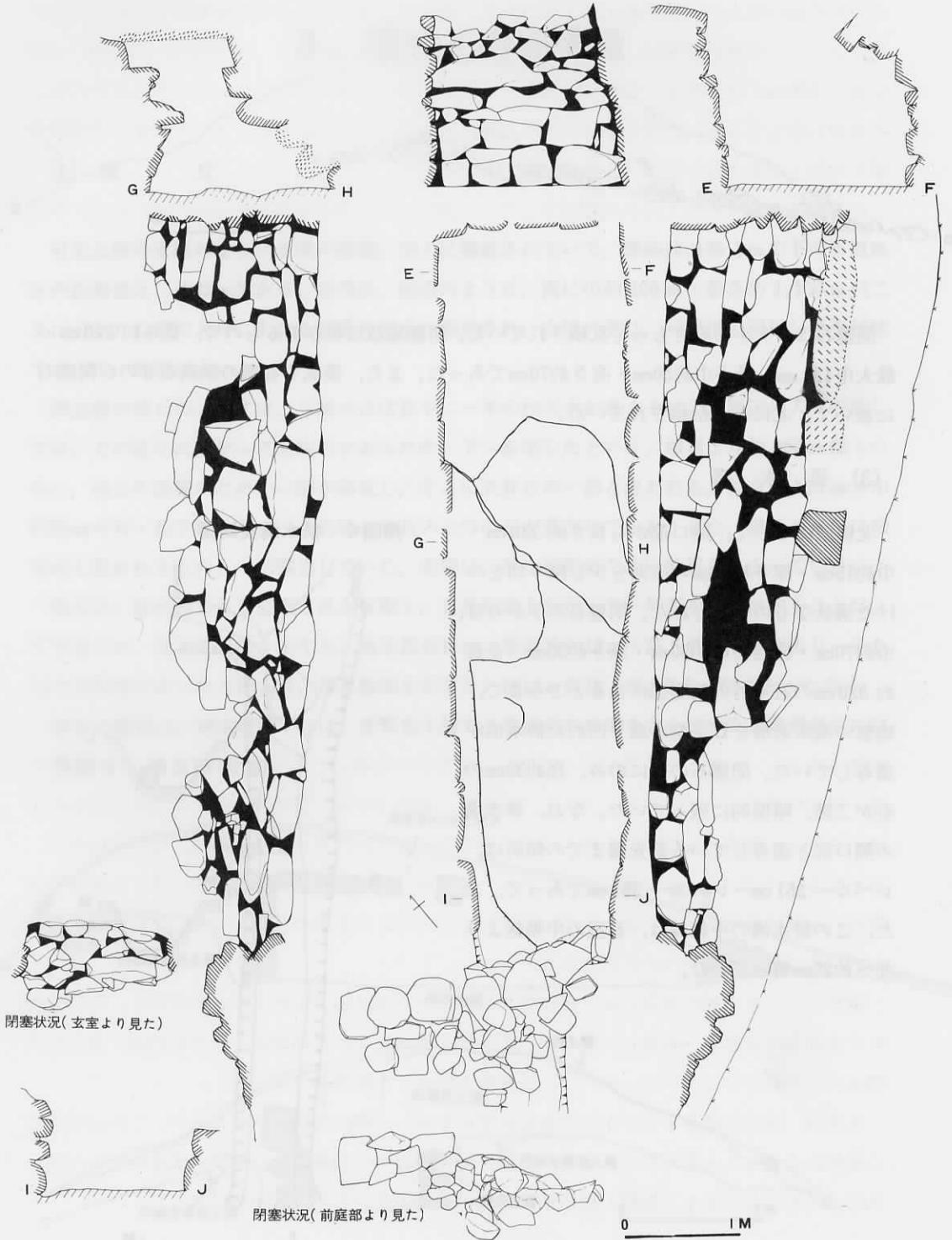
石室の規模は、全長596cm・奥壁部の中は151cmで最大中を示し、中央部での中は148cm・開口部付近で108cmという細長い長方形であった。石室の天井までの高さは、危険のため天井石を除去したため正確さをやや欠くが、もっとも遺存状態のよい奥壁部で147cm・石室中央部で114cm・開口部付近は、盗掘によって崩されていたので不明である。

石室の構築にあたっては、地山である凝灰岩層を□の字形に深さ約75cm掘り込んでいるが、開口部は、南側壁側より、約53cm北へ地山層が残されている。その凝灰岩床面の上に、花崗岩を主体とし、一部に古生層の石・川原石・凝灰岩の角礫などを積み上げている。石の大きさは、遺存状態のよい奥壁を例にとると、最大は、縦約100cm・横約30cmで、床面より高さ約120cmまでは、縦横40cm程の石を中心にして横積みがなされ、それより上部は、縦横20cm程の石を積み上げている。南北両側壁は、大きいので縦約60cm・横約40cmの石で、多くは縦横40cm程の石を横積みしている。またとくに持送りをしているとも思われなかった。積石の後面の込み石は凝灰岩の角礫が詰められていた。

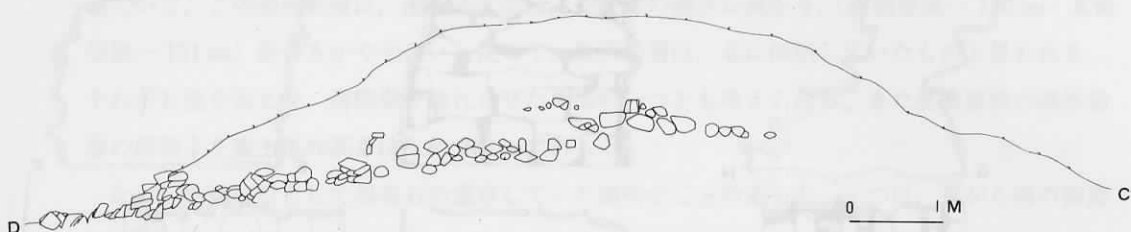
遺存していた三箇の天井石は、奥壁側から、長さ約150cm・巾約145cmの巨石と、次のは割れて大部分は石室内へ転落していたが、天井部に遺存していた部分は、長さ約70cm・最大巾約70cmの三角形になっていた。次のは、長さ約120cm・巾約70cmであった。

床面は、凝灰岩層を平らに削って作られているが、一部に凸凹がみられるが、これは凝灰岩の硬軟によるものと思われた。また、奥壁から開口部への傾斜は、レベル—223cm～レベル—242cmであった。また、閉塞石積の前に二箇のやや大きい石が、石室内にあった。

挿図4 石室実測図



挿図5 墳丘側面図（根巻石の実測……東側より）

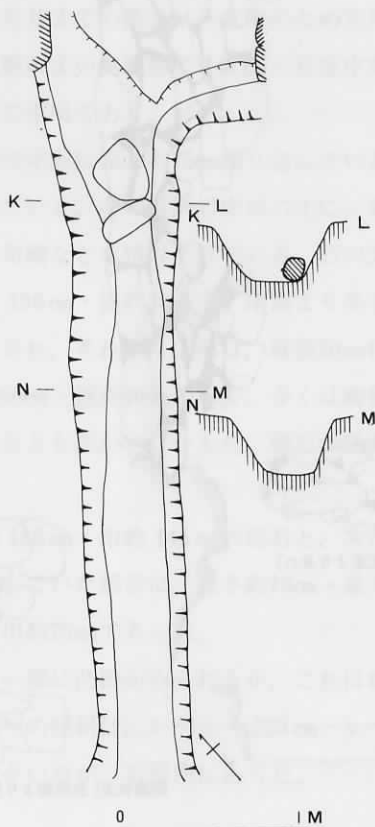


閉塞石は、大小の石でもって乱積されていた。閉塞施設は現存するもので、長さ約 220 cm・最大巾120 cm・最小巾約50 cm・高さ約70 cmであった。また、築成する際の余剰石なのか閉塞石に続いて、北に石が乱積されていた。

### (3) 排水溝

北側壁にそって、開口部から長さ約 230 cm・巾約15 cm・深さ約 7 cmの床面を少し削り凹をつけた溝状なものが見られた。閉塞石の下からは、巾約70 cm・底辺の巾約30 cm・深さ約30 cm・全長約 320 cmの石室外の前庭部に当たるまで、地盤の凝灰岩層をU字型に掘り凹めた排水溝が遺存していた。閉塞石の下にのみ、径約30 cmの石が二箇、暗渠的に残っていた。なお、排水溝の開口部と遺存している最先端までの傾斜は、レベル— 251 cm～レベル— 281 cmであって、また、この排水溝の中軸線は、石室の中軸線より北へ約25 cm寄っていた。

挿図6 排水溝実測図



## 4. 遺物の出土状況

遺物は、主として石室内から出土しているが、若干、須恵器の破片などが、石室外より出土しているが、過去の盗掘によるものか、追葬によるものか判断がつかないところである。ただ石室の天井石の上に、須恵器の大甕が(図版5・レベル—48cm)出土している。地元の人の話しによると、墳頂と思われる地点に五輪石があったが、いつの間にか下に転落したという。また、土拵墓のなかに小石混りの遺構からの出土品については後述する。

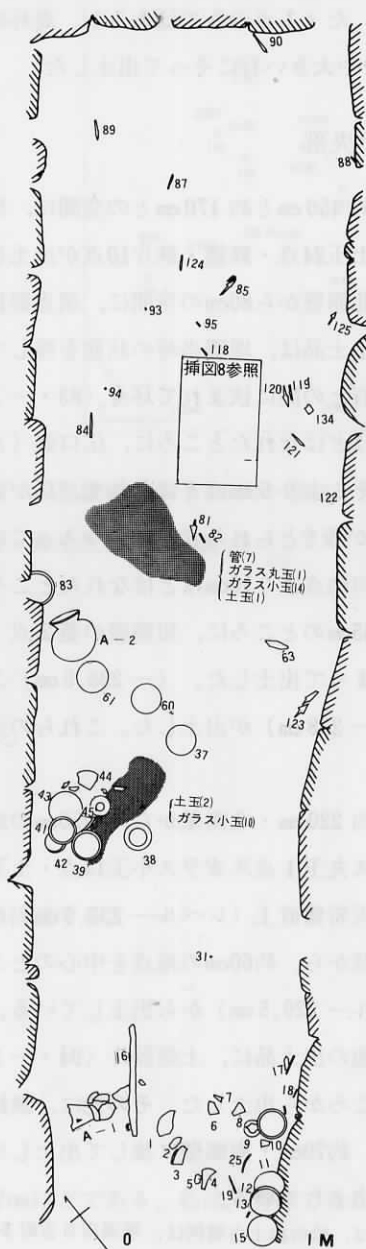
### (1) 開口部付近

(以下…( )付番号は出土番号であり—cmは、レベルである)

開口部から、110cmほどの空間に、須恵器8点・同破片数点・直刀1点・鉄鏃・鉄片7点が検出されたが、この部分は、過去に盗掘がなされ、天井石・側壁の一部が崩されていた箇所であるが、その出土状況からして、大部分が、埋葬当時の状態を残していると思われる。

北側壁から、約12cm・開口部か

挿図7 遺物の出土状況(数字は出土番号)





ら約70cmの箇所に、脚付壺（A-1・— 219.8 cm）が破損した状態で出土した。恐らく側壁などが崩れた時による破損と思われた。その近くに、把部を開口部に、刃先を奥壁の方向にして直刀（16・— 225 cm）が出土した。開口部から、南側壁にそって、坏身（15・— 219 cm）・坏身(13)に环蓋(12)がかぶせられた状態で出土し、それに接して环蓋(11)がそれより18cmほどへだてて坏身(10)と甕の胴部(9)が、それにつづいて鉄鏃(18)1点と、ややはなれて2点（17・22— 228.5 cm）が、開口部より70cmほどの間に南側壁にそって出土した。直刀とこの須恵器の並びとの間に、甕や环の破片、たゞ1点のみではあるが、高坏の脚部と思われる。透しのある破片（4— 227.5 cm）が、やや大きい石にそって出土した。

## (2) 石室中央部

奥壁から、約450 cmと約170 cmとの空間に、須恵器14点・管玉7点・ガラス小玉24点・ガラス丸玉1点・土玉24点・鉄鏃・鉄片10点が出土している。それらの出土品のうち、奥壁から約270~240 cm・北側壁から80 cmの空間に、須恵器14点・土玉2点・ガラス小玉10点が出土している。これらの出土品は、埋葬当時の状態を残していると思われた。奥壁から、270 cmのところ、北側壁の石と石との間に挟まれて坏身（83・— 230 cm）が出土し、それよりややはなれて、北側壁から10 cmほどはなれたところに、広口壺（A-2・— 236 cm）が口を奥壁に向けられた状態で出土し、そこより5 cmほどはなれて、环が蓋されたまま出土した。（61・62— 238 cm）、坏身の中には蛤が蓋をとられた状態で一つ入っていた<sup>注</sup>。（図版5）北側壁より50 cmほどのところに环蓋(60)、その地点より10 cmほどはなれたところで坏身(37)が出土した。奥壁から、約392 cm・北側壁から約45 cmのところ、短頸壺の蓋2点（40・42）・坏身・蓋など5点の合計7点の須恵器が、かたまって出土した。（— 236.5 cm）この群より10 cmほど、南側壁に寄った地点から短頸壺（38・— 238 cm）が出土した。これらの近くから、土玉2点・ガラス小玉10点が出土した。

奥壁より、約220 cm・北側壁から、約50 cmの地点を中心に、径約60 cm程のところから、管玉7点・ガラス丸玉1点・ガラス小玉14点・土玉1点が出土している。ガラス小玉類は、ほぼ床面である凝灰岩盤直上（レベル— 232.5 cm）から出土している。その近くの、奥壁から、約180 cm・南側壁から、約60 cmの地点を中心のところから土玉22点が、これもほぼ床面である岩盤直上（レベル— 229.5 cm）から出土している。

石室からの他の出土品に、土師器片（94・— 230.5 cm）が、奥壁より、約190 cm、北側壁より約48 cmのところから出土した。その他に、鉄鏃・鉄片が床面全体から点々と出土している。たゞ奥壁から、約70 cm・南側壁に接して出土した鉄鏃（88・— 218 cm）は、床面から、6 cm程高い地点から出土している。

注 東濃地域では、蛤の出土古墳例は、瑞浪市日吉町多度山5号古墳がある。（昭和40年6月）

瑞浪市教育委員会

## 5. 出土遺物

神崎山古墳から出土した遺物の品目と数量は、次の通りである。

### 1. 装身具類

管玉	9	小管玉	1
ガラス製丸玉	3	ガラス製小玉	71
滑石製管玉片	1		
土玉	49		

### 2. 武器類

直刀	1	鉄鏃	24
刀子(片)	2	他鉄片	36

### 3. 土器類

須恵器	有蓋脚付壺	1	須恵器・大型甕破片数十点(同一個体と思われる)
	広口壺	1	土師器・弥生土器片 数点
	有蓋短頸壺	1	
	甗	1	
	有蓋高坏(片)	1	
	坏身	9	
	坏蓋	7	
	高坏脚部破片	1	
	他破片	数点	石包丁 1点

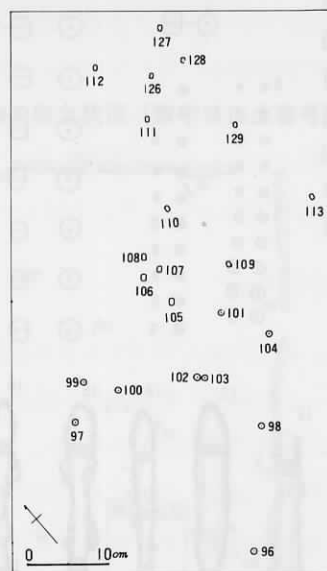
石包丁などの、土拵墓から出土したものは、後述する。

### 1. 装身具類

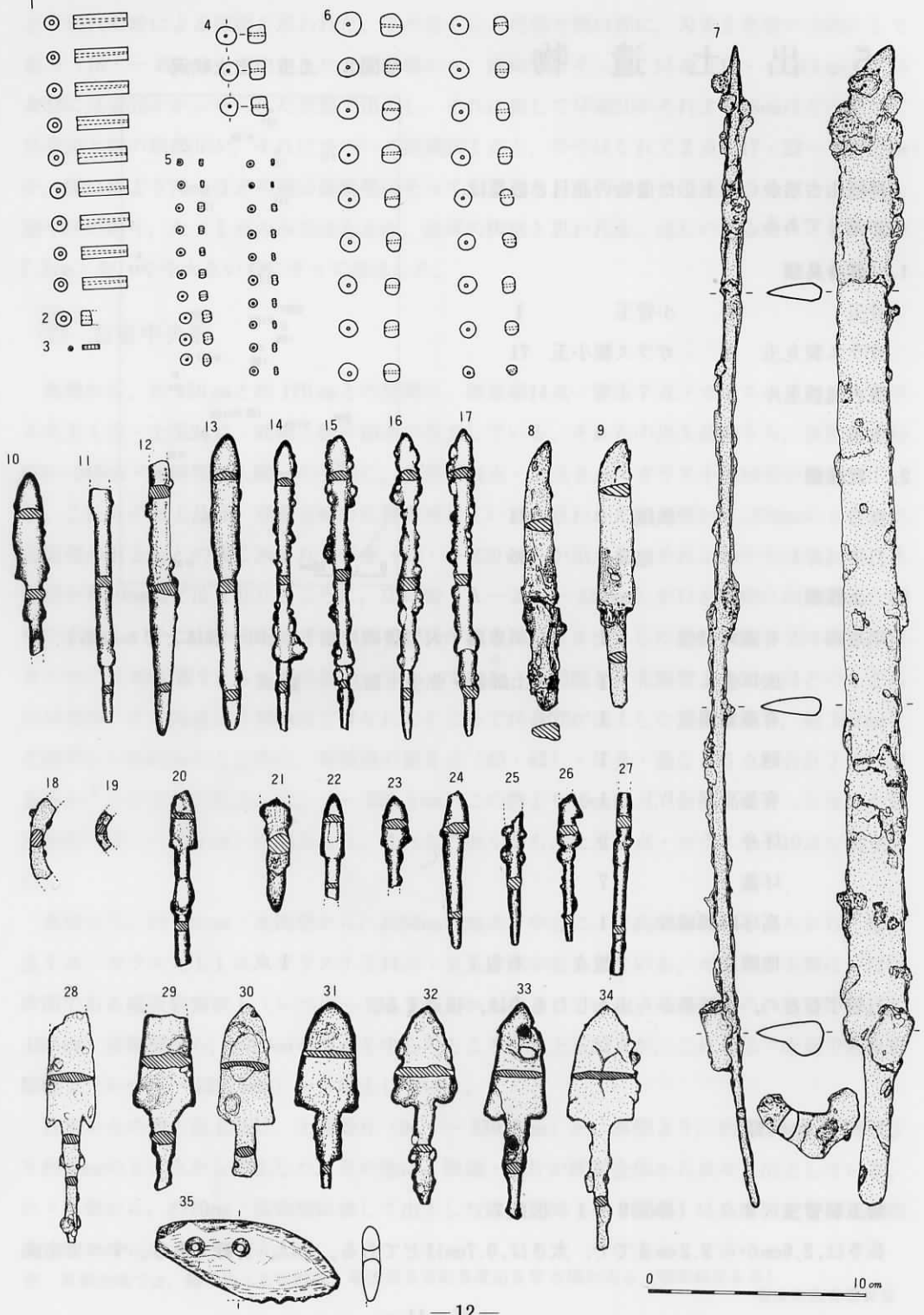
碧玉製管玉 9点 (挿図9-1 図版7)

長さは、2.6cmから2.2cmまでで、太さは、0.7cmほどである。色は、青緑である。すべて完成

挿図8 土玉・出土状況



挿図9 装身具・直刀・鉄鏃など実測図



品であり、穿孔は、片方から垂直に近い角度で穿たれ、径は穿孔側が0.3cmで一方は、0.1cmほどである。

**碧玉製細管玉** 1点 (挿図9-3・図版7)

長さ、0.9cm・太さ0.2cmで灰白石である。床面上の採取した土を水簸した際に検出された。

**ガラス製丸玉** 3点 (挿図9-4・図版7)

径0.8~0.9cmで、厚さ、0.7~0.8cm、いずれも、紺色で深い青色を呈している。

**ガラス製小玉** 71点 (挿図9-5・図版7)

検出された小玉は、床面の清掃時と、床面上の採集した土を水簸して検出したものである。色別の数は、青色39点・空色19点・黄色7点・ややうすい空色5点・赤色1点である。代表的なものの計測値は、別表の通りである。

**土玉** 49点 (挿図9-6・図版7)

径、1.1~0.5cm、厚さ1.1~0.6cmで、粘土を丸め、金属のようなものに通して焼成したものである。煤で表面は、黒色を呈している。代表的なものの計測値は別表の通りである。

他に1点、管玉の破片が出土しているが、石質は滑石である。(挿図9-2・図版7)

## (2) 鉄製品

出土点数63点であるが、銹化が著しいので、直刀1点、刀子2点、鉄鏃24点はその形状から見て確認されたが、他は、何であるか判別は不可能であった。

**直刀** (出土番号16 挿図9-7・図版8)

現長53.3cm・刀身部45.8cm・把部7.5cm・身幅2.8cm・断面厚0.8cm、透化が著しいので明らかではないが、鉄製で、推定径約5cm・厚み0.6cm楕円形の鏢の一部が残っていた。鞘・柄などは、木製だったのか遺存していなかった。把部と刀身部との付根のところに、長さ約2.5cm・巾約1.5cm・厚み約0.5cmの半円筒の鉄製品が付着していた。

**刀子** (出土番号 挿図9-8・図版8)

現長12.4cm・刀巾1.5cm・断面厚0.8cmで、小柄状を呈し、把部に木質と思われるものを残

している。他の1点は(挿図9-9)現長12.3cm・刀巾1.6cm・断面厚0.5cmで、基部4.4cm刀身部7.9cmであって、これも小柄状で、把部と刀身部との境に木質部らしいものが残っている。

### 鉄鏃

鉄鏃と認められた、24点中、11点は平根型で、13点は、尖根型である。挿図(9-34)は、現長11.3cm・刀部長5.2cm・最大巾3.1cm・厚み0.9cmである。また挿図(9-28)は、現長10.6cm・刀部長5.3cm・最大巾2.2cm・厚み0.3cm・逆刺は、0.4cmである。挿図(9-14)は、現長13.4cm・刀部長3.2cm・最大巾1.5cm・厚み0.5cmである。挿図(9-13)は、現長13.4cm・刀部長5.7cm・最大巾1.4cm・厚み0.6cmである。刀部は、落石の影響か反っているが、刀子かも知れない。

他の鉄製品中、挿図(9-18)は、推定径5.5cm・太さ0.6cmで環状のものであろう。挿図(9-19)は、推定径2cm・太さ0.5cmで銀環的なものとも思われるが風化がひどく、或は、金属ではないかも知れない。

## (3) 土器類

### 須恵器・有蓋脚付壺(出土番号A-1・挿図10-1・図版9)

総高31.2cm・器高29.2cm・壺部口径9.7cm・胴部最大径19.0cm・脚部の高さ13.6cm・裾部径20.4cm・丸底壺と脚とが結合したもので、壺部は、肩のところに四条の沈線があって、胴部全体に叩き目が施されている。脚部は、沈線で二段に分かれ、櫛描き波状文が施され、三角形透しを三方に千鳥にあけられている。壺部と脚部との接合部には、櫛歯文が施され、脚部裾には7条の沈線が入れている。胎土は良好であるが、焼成はややあまく、白っぽい色を呈している。蓋は、高さ4.3cm・口径12.0cmである。

### 須恵器・広口壺(出土番号A-2・挿図10-2・図版9)

器高22.6cm・口径15.5cm・胴部の最大径23.4cm、ほぼ全体に緑色の自然釉がかかり、ながれも見られる。また、胴部下腹部に、他の製品の破片二点が融着している。口縁部は、ラッパ状に開いて端部は、立っていて、頭部との境界は段をなしている。その段と頭部の二条の沈線との間に、櫛描き波状文が施されている。また胴部に叩き目が見られる。

**須恵器 罍**（出土番号9・挿図10—3・図版9）

器高13.4cm・口径12.3cm・胴部最大径8.3cm・口縁部がラッパ状に開き、頸部と口縁部との境は、凸帯状になっている。頸部には、櫛目波状文が施され、胴部中央には、櫛歯文が付けられ、中央に径1.2cmの貫孔がある。器面は、砂塵が付着したのか、やや粗い感じがするが、焼成は良好である。

**須恵器 有蓋短頸壺**（出土番号38・42・挿図10—4・図版9）

総高11.1cm・蓋径9.9cm・口径8.0cm・胴径13.0cm・蓋と身とが一緒に焼成され、身に蓋のひっつき跡が残っている。また全体に自然釉に砂塵が付着している。胴部の最も張り出したところに斜行櫛歯文を施している。蓋は、天井部に、高さ0.7cm・径3.9cmの中凹みの、やや扁平なつまみがつき、天井部と口縁をわける稜がある。

**須恵器 有蓋高坏身**（出土番号3・挿図10—6・図版9）

底部と脚部が遺存していないが、底部にわずかに高坏である痕跡を残している。（透しが入っている脚部の破片が出土しているが（挿図10—8）当高坏のものかどうか不明である。）遺存部分の器高5.9cm・口径14cm・蓋受け部の径17cmで、器内に点々と自然釉なのか、黒い斑点がみられる。焼成は、やや不良で白っぽい。

**須恵器 有蓋高坏蓋**（出土番号8・挿図10—5・図版9）

先の高坏身とセットと思われる。器高5.6cm・蓋径16.6cm・天井部に、高さ0.9cm・径4.3cmのやや扁平のつまみが付着している。内面には、点々と自然釉なのか、黒い斑点がみられる。焼成は、やや不良で白っぽい。

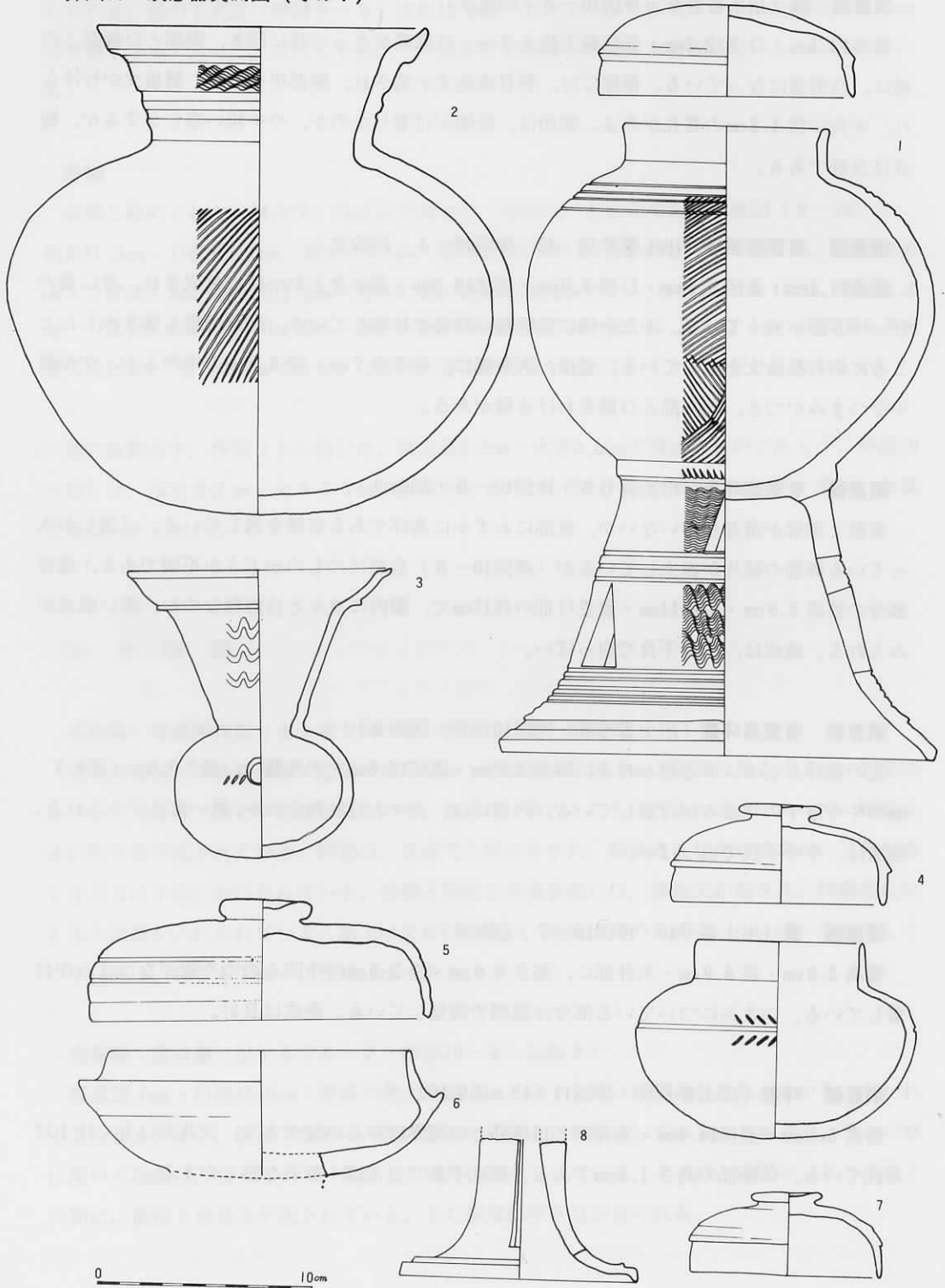
**須恵器 蓋**（出土番号40・挿図10—7・図版9）

器高3.8cm・径8.9cm・天井部に、高さ0.6cm・径3.3cmの中凹みのやや扁平なつまみが付着している。つまみについている部分は篋削で調整している。焼成は良好。

**須恵器 坏蓋**（出土番号10・挿図11—13・図版10）

器高5.2cm・蓋径14.4cm・天井部と口縁部との境界にゆるい稜があり、天井部は丸く仕上げられている。口縁部の高さ1.8cmである。焼成不良で白っぽく軟弱な感じがする。

挿図10 須恵器実測図 (その1)



**須恵器 坏蓋** (出土番号11・挿図11—15・図版10)

器高 3.2cm・蓋径14.5cm・天井部が歪んでいて扁平である。また器面に少し他のひっつきが見られる。天井部と口縁部との境界に稜をもつ、口径部の高さは、1.5cmである。

**須恵器 坏身** (出土番号12・挿図11—4・図版10)

器高 5.2cm・口径13.1cm・蓋受け部の径14.9cm・坏部の深さ 4.6cm・立上りの内側への傾きは余りない。内面に同心円文が残っている。後述の坏蓋(出土番号13)と合せたまゝで出土している。

**須恵器 坏蓋** (出土番号13・挿図11—3・図版10)

器高 4.8cm・蓋径14.6cm器面は篋削で調整してある。2.1cmほど立上って稜があって、天井部は丸く仕上っている。焼成不良で白っぽい。前述の坏身(出土番号12)と合せられたまゝ出土している。

**須恵器 坏身** (出土番号15・挿図11—12・図版10)

器高 5.4cm・口径12cm・蓋受け部の径14.5cm・坏部の深さ 4.8cm・立上りは内側に傾いている。器面全体に篋削りして調整され、焼成も良好である。

**須恵器 坏蓋** (出土番号37・挿図11—7・図版10)

器高 5.4cm・口径14.0cm・2.4cmほど立上って稜があり、天井部は篋削りで調整してある。焼成は、不良でやや白味を帯び、軟弱な感じである。

**須恵器 坏身** (出土番号39・挿図11—8・図版10)

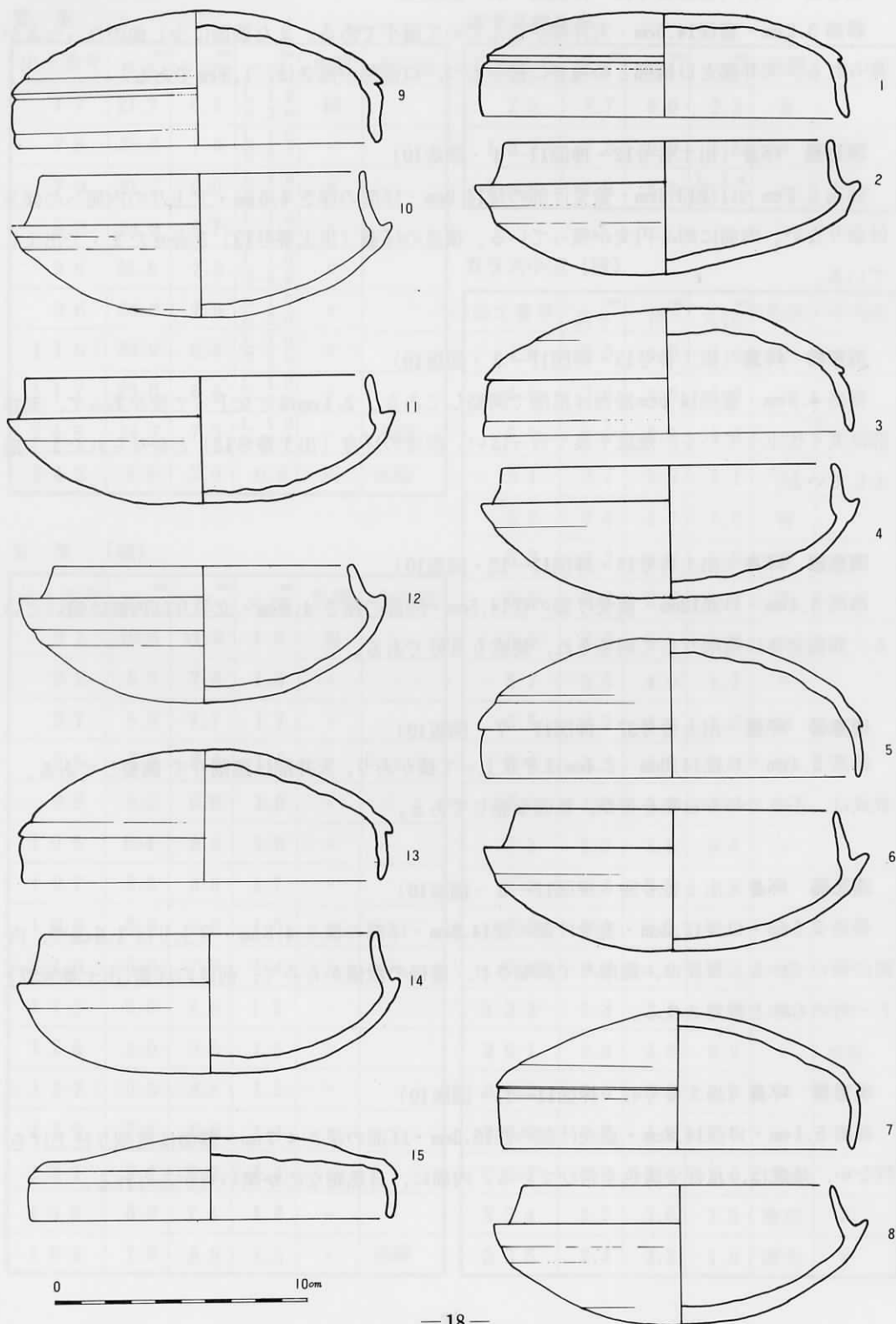
器高 5.5cm・口径12.3cm・蓋受け部の径14.8cm・坏部の深さ 4.8cm・立上りは 1.6cmで、内側に傾いている。器面は、篋削りで調整され、蓋径の数値からみて、前述の坏蓋(出土番号37)と一対のものと推定される。

**須恵器 坏身** (出土番号41・挿図11—11・図版10)

器高 5.1cm・口径14.8cm・蓋受け部の径15.3cm・坏部の深さ 4.7cm・器面は篋削り仕上げを行ない、焼成は、良好で灰色を帯びている。内面に、自然釉なのか黒い点が見られる。



挿図11 須恵器実測図（その2）



**須恵器 坏身**（出土番号43・挿図11—14・図版10）

器高 5.5 cm・口径13.4 cm・蓋受け部の径15.2 cm・坏部の深さ 4.9 cm・器面は、篋削りがおこなわれ、焼成も良好である。

**須恵器 坏身**（出土番号44・挿図11—10・図版10）

器高 5.6 cm・口径12.8 cm・蓋受け部の径15.1 cm・坏部の深さ 5.1 cm・蓋受け部の一部分に、蓋との重ね焼きしたものか、ひつつきが残っている。焼成は良好でやや黒っぽい色をしている。

**須恵器 坏蓋**（出土番号45・挿図11—9・図版10）

器高 5.3 cm・口径14.4 cm・口縁部の高さは 2.2 cmで、天井部と口縁部との境界に稜がある。

**須恵器 坏蓋**（出土番号60・挿図11—5・図版10）

器高 5.5 cm・口径14.9 cm・口縁部の高さ 2 cm・天井部と口縁部との境界に稜があり、焼成は不良で、白っぽく軟弱である。後述の坏身（出土番号83）と一対のものと推定される。

**須恵器 坏身**（出土番号83・挿図11—6・図版10）

器高 5.6 cm・口径12.7 cm・蓋受け部の径15.2 cm・坏部の深さ 5.1 cmである。焼成は、不良で白っぽく軟弱である。蓋径などの数値から、前述の坏蓋（出土番号60）と一対のものと推定される。

**須恵器 坏身**（出土番号61—1・挿図11—2・図版10）

器高5.2 cm・口径13.2 cm・蓋受け部の径15.3 cm・坏部の深さ4.7 cm，焼成は良好である。後述の坏蓋（出土番号61—2）と合せられたまま出土し、この坏身の中に蛤が一個遺存していた。

**須恵器 坏蓋**（出土番号61—2・挿図11—1・図版10）

器高 4.1 cm・口径14.6 cm・口縁部の高さ 1.9 cm，焼成は良好であるが歪みがみられる。前述の坏身（出土番号61—1）と合せられたままに出土した。

その他に、須恵器の坏の破片が数点出土しているし、天井石上に、11世紀頃の須恵器の大甕と思われる破片がやや多く出土しているが同一個体のもと思われるが復元までにいたらなく従って推定値をも計測することは不可能であるが厚さ 1～1.5 cmで表面に叩き目が見られる。

（図版 5）

玉類実測値数

管 玉

出土番号	長さ <sup>mm</sup>	太さ <sup>mm</sup>	穴径 <sup>mm</sup>	色調	その他
77	21.7	6.5	L 1.2 S 3.0	緑	
78	25.8	7.0	L 1.0 S 2.7	〃	
79	21.7	6.0	L 1.0 S 2.8	〃	
80	24.8	6.7	L 1.0 S 2.8	〃	
95	25.8	7.0	L 1.0 S 2.8	〃	
96	24.0	7.0	L 1.0 S 2.8	〃	
116	23.0	6.8	L 1.0 S 2.6	〃	
117	23.0	6.8	L 1.0 S 2.8	〃	
245	24.7	7.0	L 1.0 S 2.7	〃	水簸
242	8.6	2.0	0.9	灰	水簸

土 玉 (抜)

出土番号	高さ <sup>mm</sup>	径 <sup>mm</sup>	穴径 <sup>mm</sup>	色調	その他
31	10.6	11.0	1.2	黒	
92	5.5	7.0	1.4	〃	
97	5.5	7.7	1.7	〃	
98	7.2	8.4	1.0	〃	
99	5.5	6.0	1.0	〃	
103	6.4	8.6	1.0	〃	
107	6.0	8.0	1.7	〃	
108	6.0	8.0	1.5	〃	
110	5.0	7.8	1.4	〃	
112	5.0	8.0	1.2	〃	
126	8.0	9.6	1.5	〃	
127	6.5	8.8	1.5	〃	
129	7.4	8.6	1.4	〃	
131	5.4	8.2	1.4	〃	
136	6.0	7.4	1.2	〃	
182	7.0	8.0	1.5	〃	水簸

ガラス製丸玉

出土番号	高さ <sup>mm</sup>	径 <sup>mm</sup>	穴径 <sup>mm</sup>	色調	その他
75	7.7	9.0	2.2	青	
137	7.0	9.0	1.8	〃	
138	7.6	8.0	L 1.4 S 1.2	〃	

ガラス小玉 (抜)

出土番号	高さ <sup>mm</sup>	径 <sup>mm</sup>	穴径 <sup>mm</sup>	色調	その他
48	2.5	4.0	1.6	空	
49	3.5	4.6	1.2	〃	
50	2.0	3.8	1.2	〃	
51	2.7	3.0	1.1	〃	
52	2.8	4.2	1.0	青	
53	2.2	4.0	1.0	空	
55	3.2	3.8	1.2	青	
56	2.0	3.8	1.2	〃	
57	2.5	4.0	1.2	〃	
65	2.2	3.0	1.2	緑	
66	3.5	5.0	1.6	青	
70	1.5	2.7	1.0	〃	
71	1.7	3.0	0.8	〃	
72	4.8	5.1	1.4	〃	
73	4.1	5.1	1.6	〃	
74	3.0	4.0	1.2	緑	
133	1.3	2.4	0.8	黄	
201	2.8	3.0	0.9	〃	水簸
202	3.0	3.0	1.0	〃	〃
203	2.7	4.0	2.0	〃	〃
207	1.6	2.8	1.0	赤	〃
234	2.7	3.6	1.5	薄空	〃
235	2.4	3.3	1.0	薄空	〃

## 6. 出土ガラス小玉の調査分析結果

石塚硝子株式会社研究所 城 所 宜 幸  
山 本 幸 一  
野々垣 智 彦

昭和51年6月17日、六世紀頃と思われる古代の硝子製ビーズの破片を入手した。この破片は岐阜県可児郡可児町広見瀬田の神崎山古墳より出土したもので、同町教委より調査分析を依頼されたものである。

現代のビーズは高度な技術により、作られているため、殆んど泡や石の介入すること少なく均一で、美しいものである。そのため、現代の硝子と比較することで、当時の硝子が、どんなものか少しでも判ればと考え、外観観察の結果と共に成分分析を行なうこととした。

### 1. 供 試 試 料

外観上、薄緑色をしたビーズ(A)とコバルトブルーの破片(B)の二種類である。

A 径、約3mm、厚さ約1.5mmのビーズで、ほぼ2:1に割れていた。(0.0378g)

B 径、約2mm程のビーズの破片と考えられる。(0.0037g)

### 2. 外 観

実体顕微鏡による観察

A 外表面には、黄土色をした砂が付着して居た。この付着した砂の周囲は凹んだような感じに見られかなり長い年月、付着したまま、で経過しているものと考えられる。

〔色調〕薄い緑色で、半透明に近く、光線の状態で白っぽく見える部分もあった。(クラックによる反射の状態により)全体にかなり均一な色調を程しており、よく見ると色ムラ等かなり少ないものである。

〔表面〕かなり風化した外観をして居り、ところどころに破れ泡が見られ、その泡の中に、黄土色の砂(土粒か?)がつまって居た。硝子の表面には、細かい突起の様な殆んど点と思われるようなツブが見られ、全体に樹枝状の細かい模様を形作るミゾの様な細い線があ

って、明らかに風化した表面と考えられる状態であった。

尚表面の所々に径約 0.5 mm 以下のごく浅いならかな凹みがあり、成形時に出来たものが、風化して凹みが生じたかはわからないが、現代のビーズ等には見られない点と考えられる。

〔内部〕微細な泡が多く散在して居り中にはかなり大きい泡も混じって居た。特に大きなものは、割れた面に見られるもので径約 0.5 mm 程であった。硝子そのものは、かなり均質のものと考えられ、特にスジ等の不均質に起因すると考えられる状態は見られなかった。やや小さい、赤っぽいだいたい色の固形物が入っていたが、これは、原料の未溶解物とも考えられるが、この硝子自体が人造か、又は天然硝子を加工（再溶解も含めて）したものか判断できないので不明である。もし、人造とすれば、或いは、銅粉の未溶解物かもしれない。

B 試料Aと同様に外表面には、かなり黄色土をした砂が付着して居り、見た感じでは、かなり強固にくっついている様子であった。

〔色調〕濃青色で、透明度は、試料Aよりも高く美しくすんだ感じを受ける。全体に色はかなり均一であるが、割れた面には、かなりはっきりと脈理と思われた、シマが観察された。この点、試料Aとくらべ、均質度が悪いと考えられる。

〔表面〕かなり風化している点は、試料Aと類似している。又外表面に出た破れ泡は、見られなかったが、所々に浅いならかな凹みがある。尚、表面全体に樹枝状の細かい模様が見られることなど、試料Aと殆んど同様であった。

〔内部〕微細な泡がかなり散在しておるが、特に大きなものはみられなかった。その他、石やツブのようなものは認められなかったが、試料が小さい為、充分観察できなかった。試料Aに見られるような、明らかに内部に未溶解物と考えられるものはなかったが、脈理と考えられる層状のシマが見られることから、成分的な不均質なものが残っているものと思われる。

#### 偏光顕微鏡による観察

試料Bについては、形状の関係から殆んど観察できなかった（視野全体が暗い為）従ってここでは、試料Aについて観察した。形状による光の明暗以外に明らかに歪が残っているような偏光性は認められなかった。しかし、点々と偏光性のある部分があって、未溶解のものと考えられる。尚、この偏光性のツブの周囲にわずかに歪らしい様子がうかがわれた。

### 3. 蛍光X線分析結果

試料が小さい為、十分な分析はできなかったが、現在のビーズとの比較ができるようにしておいた。

#### 化学組成

成 分	試 料 A	試 料 B	現代の ビーズ
SiO <sub>2</sub> (酸化ケイ素)	56.0	64.2	71.0
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (酸化アルミナ)	6.8	4.5	1.6
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (酸化第二鉄)	0.6	0.36	0.05
TiO <sub>2</sub> (酸化チタン)	0.5	0.79	0.005
CaO (酸化カルシウム)	2.0	3.9	0.1
MgO (酸化マグネシウム)	0.2	0.4	0.01
Na <sub>2</sub> O (酸化ナトリウム)	23.0	24.1	25.0
K <sub>2</sub> O (酸化カリウム)	1.3	1.6	0.7
SO <sub>3</sub> (三酸化硫黄)	0.4	0.6	0.1
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (酸化クロム)	0.008	0	0
MnO <sub>2</sub> (酸化マンガン)	0.1	0.18	0
CuO (酸化銅)	0.5	0.03	0
ZnO (酸化亜鉛)	0.004	0	1.5
SeO <sub>2</sub> (酸化セリウム)	0	0	0.04
CoO (酸化コバルト)	0	0.007	0
SrO (酸化ストロンチウム)	0.02	0	0
ZrO <sub>2</sub> (酸化ジルコニウム)	0.05	0.002	0.004
色 調	淡青緑色	濃青色	橙 色

注 試料が微量の為、十分な精度は得られなかった。尚、試料Aは、上記以外の成分が含まれる可能性も考えられる。(例えば、B<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, Li<sub>2</sub>O……)

## 7. 土 拡 墓

封土観察の為のトレンチに、奥壁裏面より約190 cm東北のところに、現存長約249 cm、巾約114 cmで、最深値19 cm・最浅値8 cmの凝灰岩層を掘りくぼめ、そこにこぶし大の川原石、混りの黒土色を盛り上げてあったと思われる遺構が検出された。(レベル—234 cm) この遺構の中より、小指先程のぼろぼろに風化した骨片がほぼ全域より検出されるとともに、土器片と石包丁の破片を再利用したものが出土した。

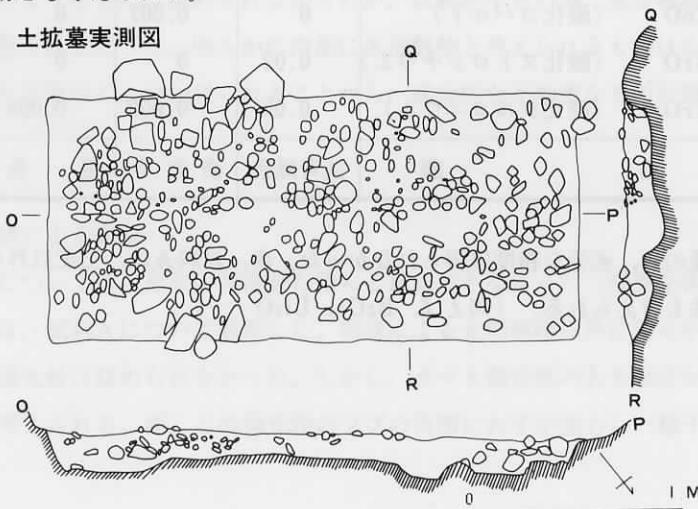
残念なことは、今回の土採取のためと古墳造営のために、完全に残っていなかったことである。盛土になっていたであろう、川原石混りの黒色土は、奥壁周辺に層になっていて、封土の一部に利用されていることが伺われ、封土観察のトレンチより点々と出土した土器片は、この土拡墓のものとして推定される。

なお、防災工事の為、他の封土を取り除く時、立合ったが、他の遺構は見出されなかった。

当土拡墓のなかから出土した土器の破片はすべて小破片ばかりで、十分なる考察をすることは不可能であるが、数点には、条痕文があり(図版6)その施文具合からみて、弥生後期前葉と思われる節がある。

他に石包丁が1点出土した。(挿図9—35) 現存長8.6 cm・最大巾3.5 cm・厚さ0.9 cmで、粘板岩製で、2孔を有し、孔の間隔は、2 cmである。破損したものを再度利用している。場合によっては、祭礼遺物とも考えられる。

挿図12 土拡墓実測図



## 8. 結 語

当古墳は、先述のごとく墳丘・天井石・側壁の一部が、自然的・人為的（盗掘と今回の土採取）に崩されていたので明確な規模を知ることは不可能であるが、根巻石の状況からみて、南北の径13m程、高さは、天井石が遺存していた、奥壁直上が一番高く225cmであったので少くとも、高さ2.5m以上の規模をもった、羨道部と石室部とが明確でない長方形の横穴式石室を有する古墳である。

遺物は、ほゞ床面上より出土していて、須恵器の広口壺の頸部の櫛目文・脚付壺の脚部の櫛目文と二段の千鳥の三角透し・有蓋短頸壺の胴部の斜行櫛歯文・<sup>(注1)</sup> 罎の頸部の櫛目文の状態・<sup>(注2)</sup> 環の立上りの状態などからみて、第1期の第2小期にあたと考えられる。

しかし、追葬がおこなわれたと思われる節もあり、また環の立上りなどからみても若干下ると思われるものもある。

また、当古墳が盛土をもっていたと思われる。土拵墓の上に造営されていて、その中より、弥生後期のものと考えられる遺物が若干出土していることは、特筆すべきことであるが、残念なことに、完全な姿で遺存していなかったことから十分なる追求ができなかった。

当古墳を含めて、広見瀬田地区の古墳群を造営した人々の生活基盤は、南の山間に奥深く広がる谷間平坦地がまず第一に考えられ、次いで北側に広がる平坦地であると思われる。それらの地への稲作の波及と、それ以来の聚落の発達だとか、埋葬法の推移だとか、古墳の被葬者の、この地域における支配関係などと、今後も種々な面から考察を加える必要がある。

なお、墳丘ほゞ中央よりやや西へ、下った地点の表土より—48cm下に、11世紀の頃の大甕が検出されている。

(1) 当地域には、この種の長方形の石室の例として、杉ヶ洞古墳がある。昭和48、「杉ヶ洞古墳発掘調査報告書」(可児町教育委員会)

(2) 樽崎彰一 「後期古墳時代の諸段階」名古屋大学文学部10周年記念論集 昭和43





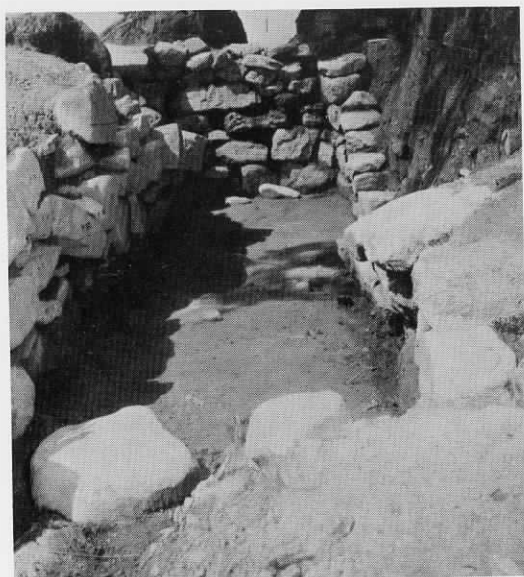
神崎山古墳遠景  
—— 北方より望む ——



神崎山古墳近景



盗掘による天井石の崩落状況



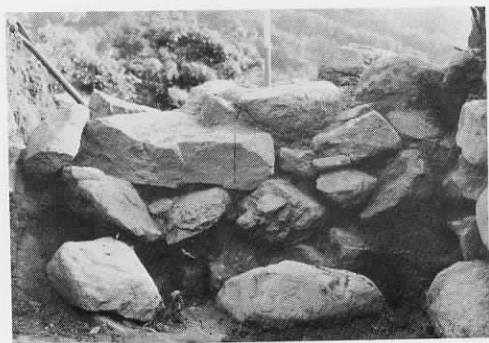
石室全景  
—— 奥壁を望む ——



奥壁裏の状況



天井石の遺存状況



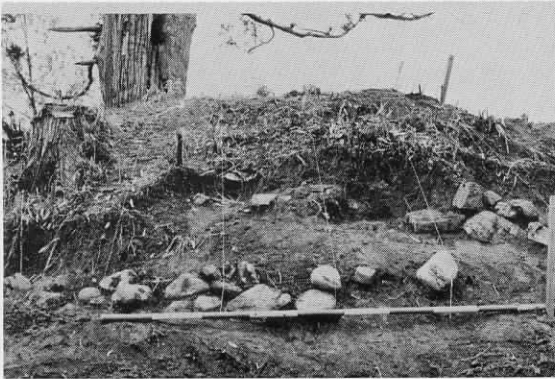
閉塞状況  
—— 石室より望む ——



閉塞状況  
—— 前庭部より望む ——



排水溝  
—— 上より望む ——



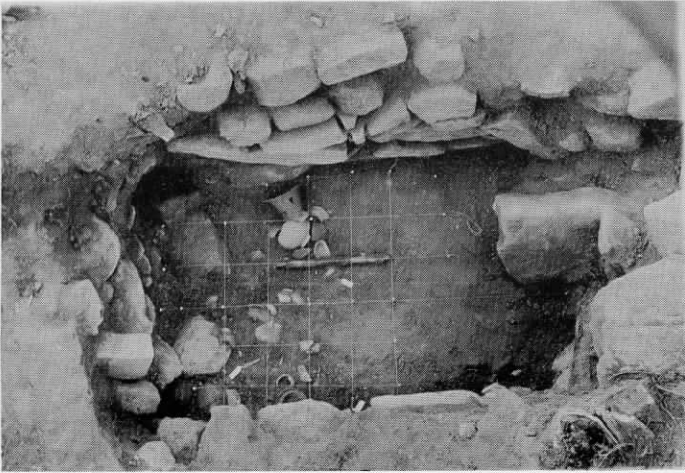
根巻石  
—— 東南部の状況 ——



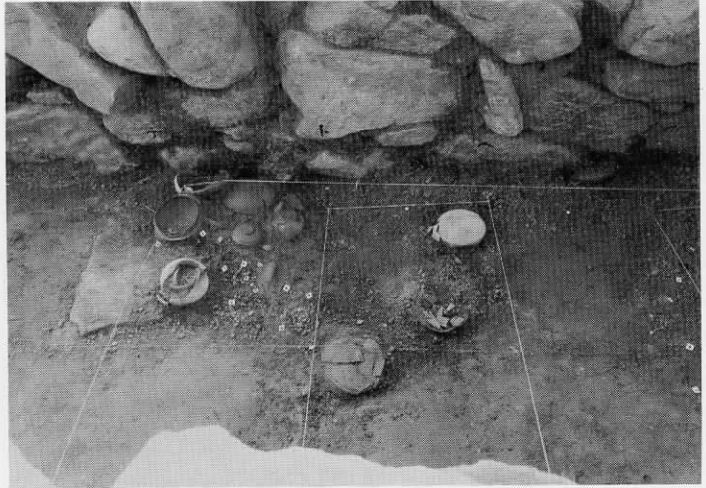
根巻石の状況  
—— 上より望む ——



石室基底部

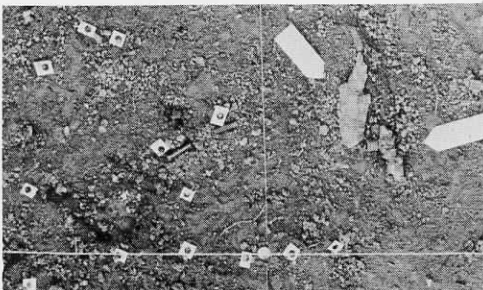


開口部近くの出土状況



石室中央部の出土状況

—— 小四角の紙は小玉の所在を示す ——



鉄鏃・管玉・小玉類の出土状況



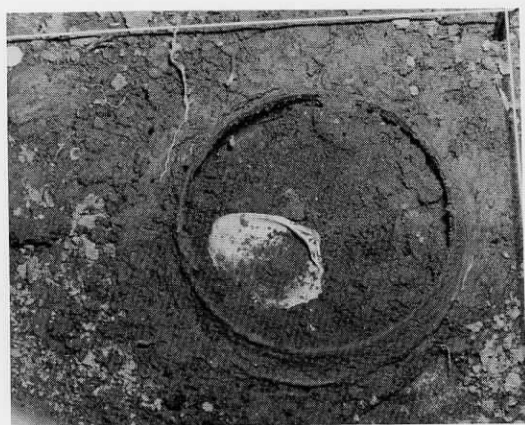
土玉の出土状況



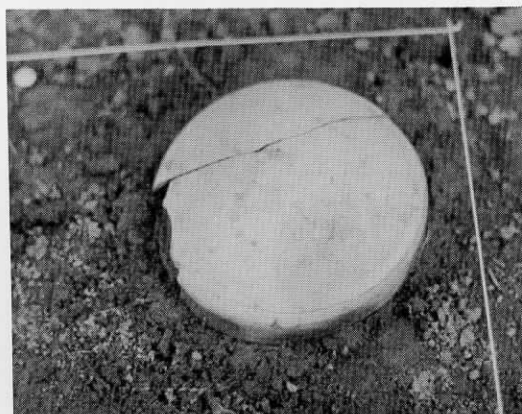
広口壺の出土状況



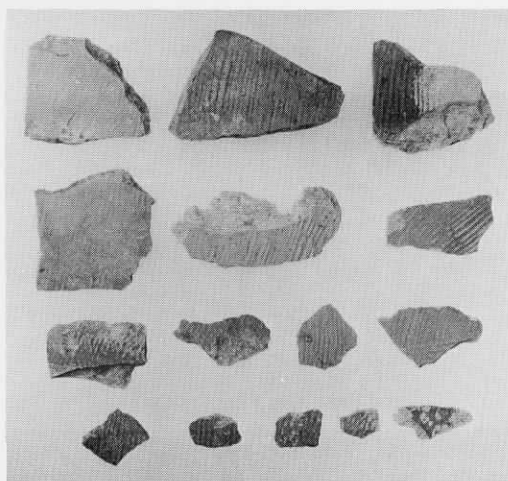
平根型鉄鎌の出土状況



蛤の入っていた環の出土状況



天井石上の  
須恵器大甕片





土 拡 墓



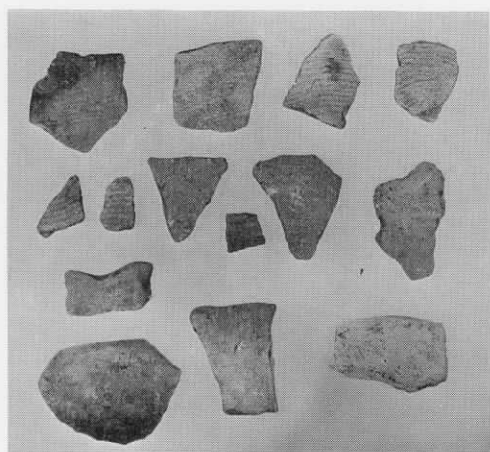
上から望んだ土拡墓



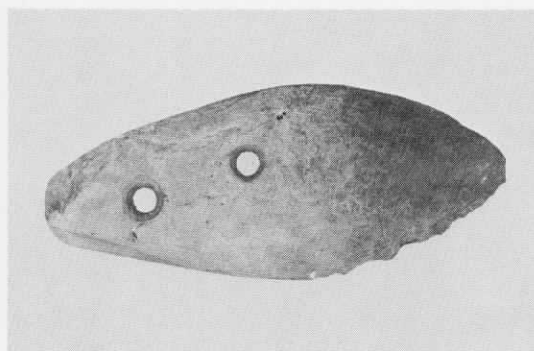
石包丁出土状況



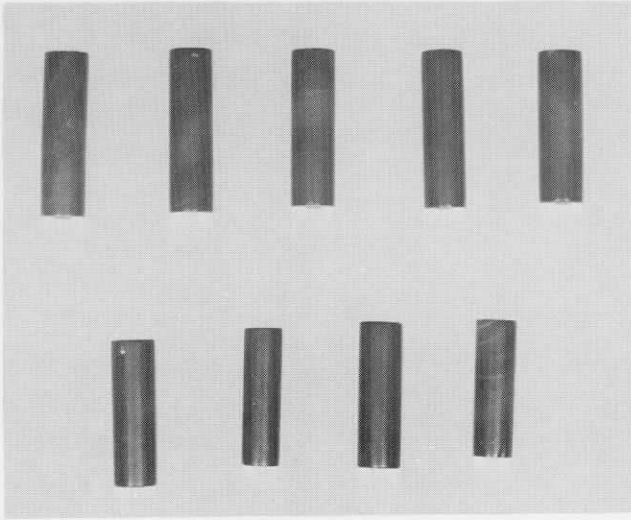
土拡墓・地山掘込状況



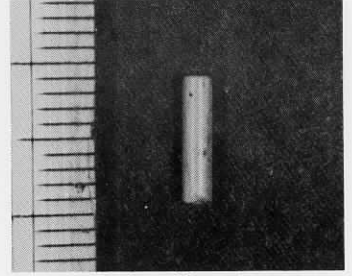
土 拡 墓 出 土 土 器 片



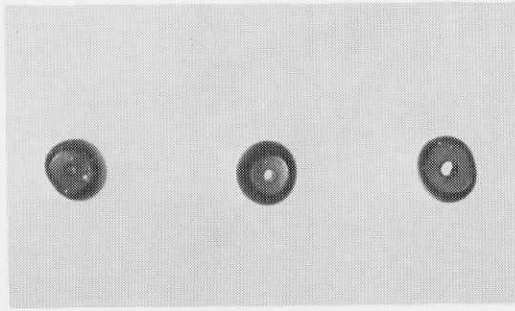
石 包 丁



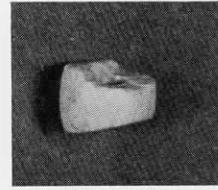
管 玉



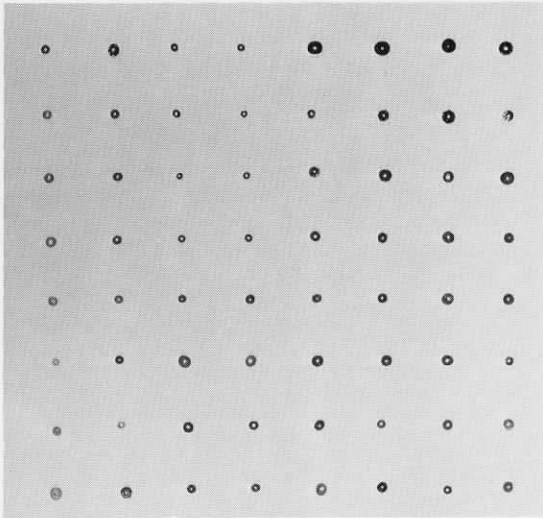
細 管 玉



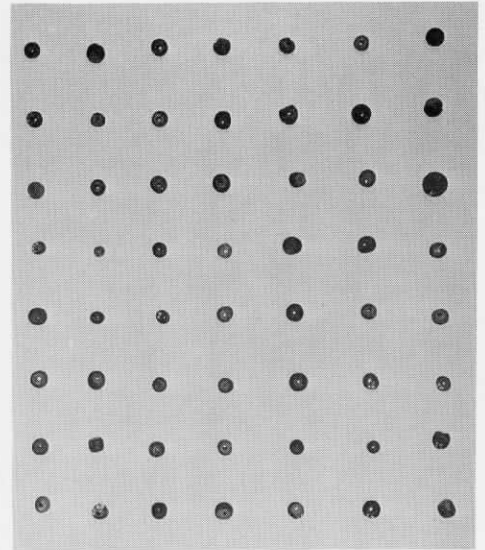
ガラス製丸玉



管 玉 片



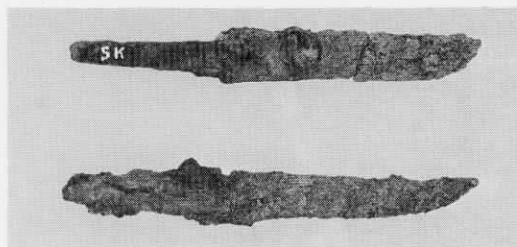
ガラス製小玉



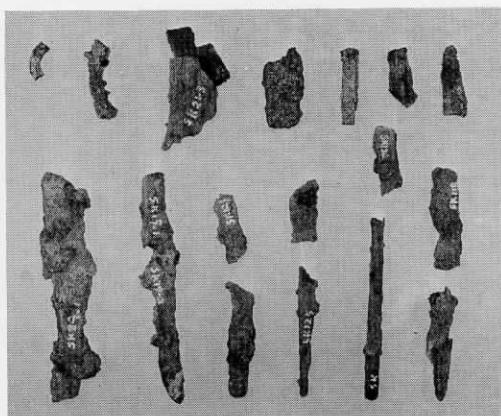
土 玉



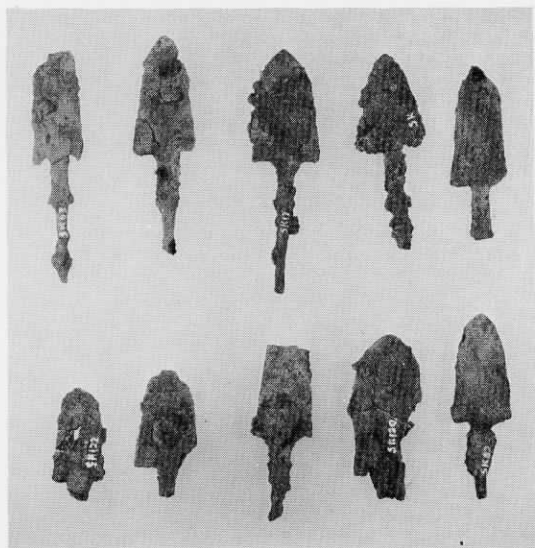
直 刀



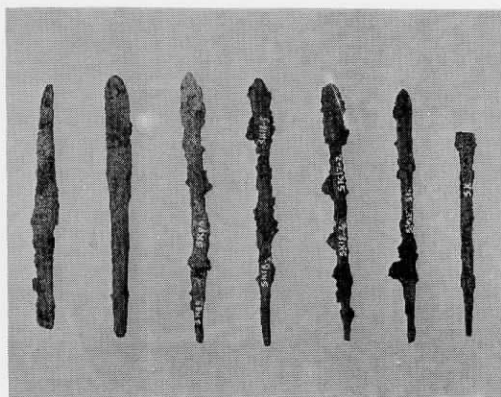
刀 子



鉄 片



鉄 鍬 (平根型)

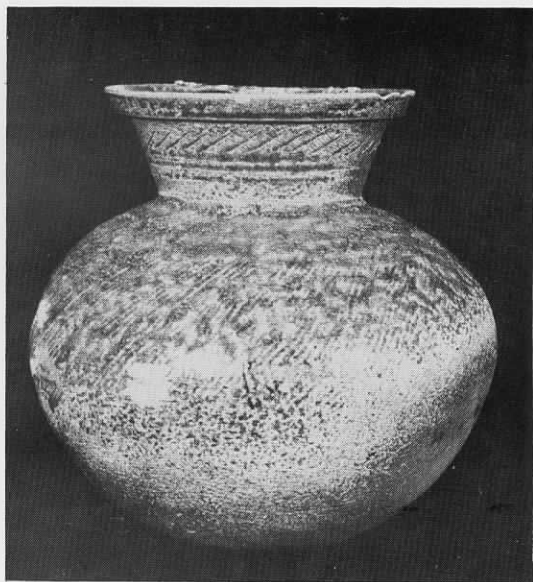


鉄 鍬 (尖根型)





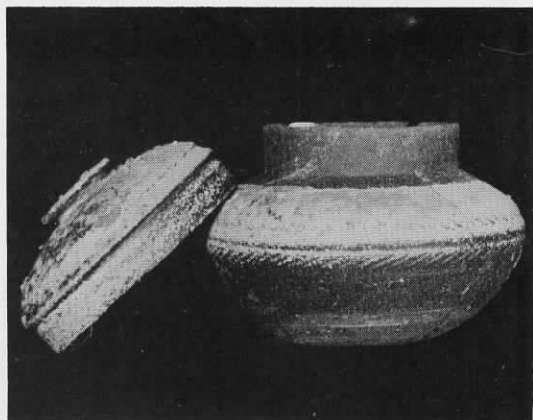
1



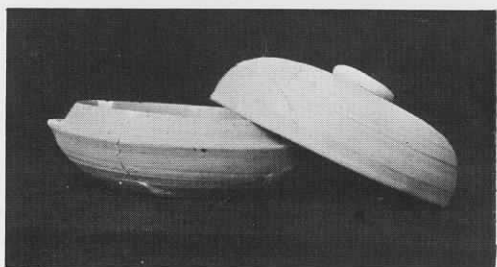
2



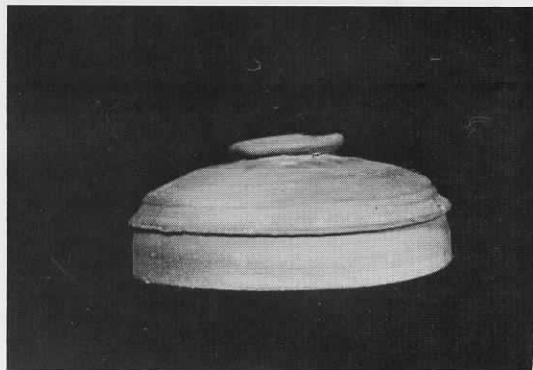
3



4



5

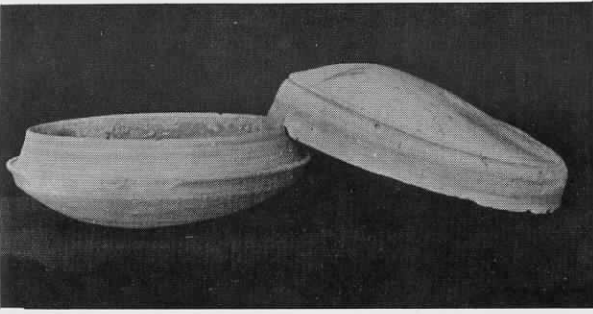


6

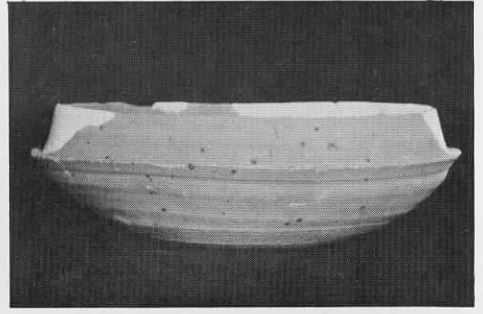
1. 脚付壺    2. 広口壺  
 3.   窠        4. 短頸壺  
 5. 高环(盖·身)    6. 盖  
 7. 高环脚部破片



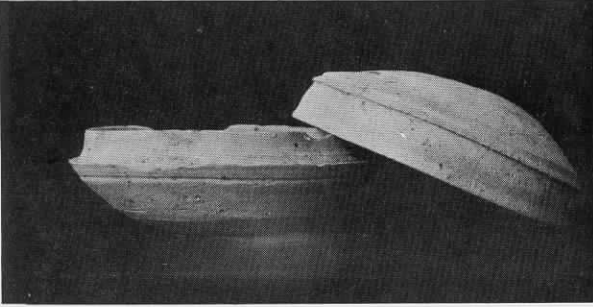
7



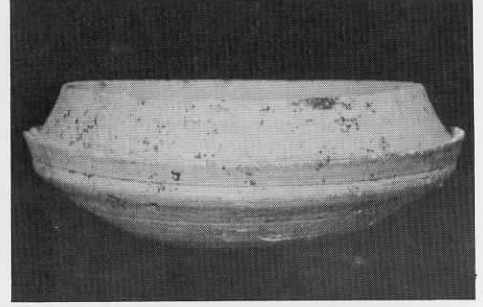
1



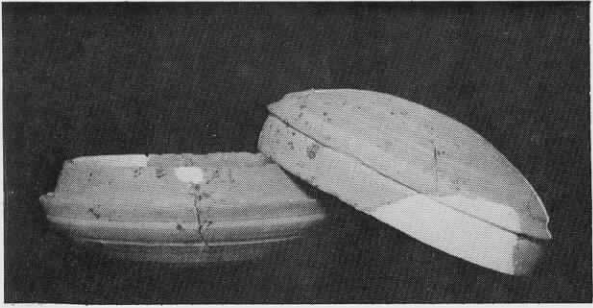
6



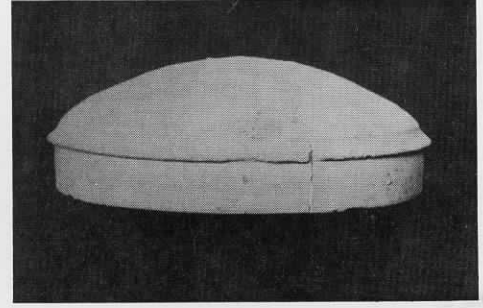
2



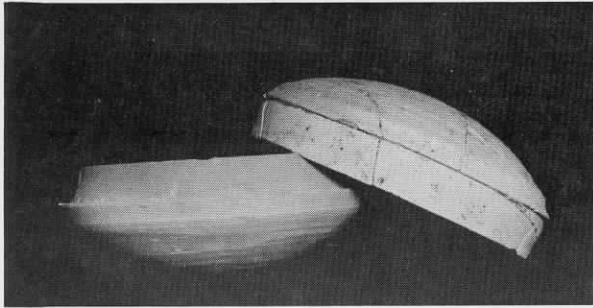
7



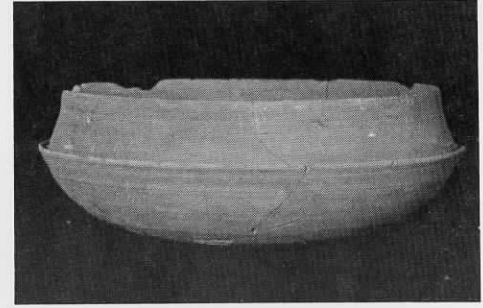
3



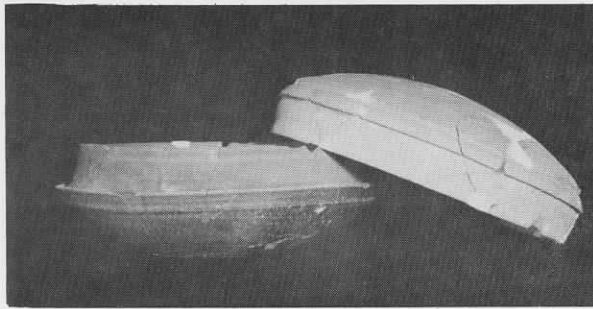
8



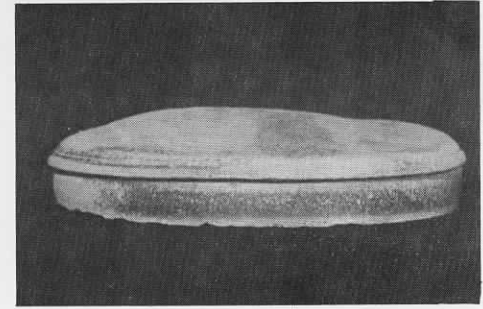
4



9



5



10